



お問い合わせ

立教セカンドステージ大学(RSSC)事務室

E-mail: rssc@ml.rikkyo.ac.jp TEL: 03-3985-4672

July 2020

新しい立教セカンドステージ大学を目指して I

RSSC 教員 立教大学名誉教授 高橋 輝暁



「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。」——川端康成の小説『雪国』の冒頭に窺われるのは、非日常の地に向かう主人公の不安と期待です。私たちが不安と期待を抱きながら、コロナ禍の「長いトンネル」の先を見えています。そこは「国境」を越えた「雪国」で、従来の日常の世界ではありません。SARS(2002)、新型インフルエンザ(2009)、MERS(2012)、今回の新型コロナ(2019)と続き、最近の20年足らずに4回のパンデミック発生です。

次々と襲来する感染症との共生が、21世紀の人類には不可避のようです。このように非日常が日常になるとき、シニア世代も持続可能な「新しい生活様式」に順応せざるをえません。

しかし、不安だけでなく、期待もあります。スマホやパソコンも含めて、AIテクノロジーは、治療や感染予防の対策はもとより、身体的距離を保つ中で心の距離を縮めるのにも役立っているようです。これらの新技術をシニア世代の「新しい生活様式」の充実に活かす方策の探究は、まさに立教セカンドステージ大学が取り組むべき新しい課題です。オンラインによる〈自由な市民〉の学びやコミュニティづくり、遠距離を超えてのグループ活動や社会貢献活動、IT技術も活用した新しいライフスタイルなど、受講生の皆さんと一緒に考えたいテーマがたくさんあって、開講が楽しみです。

RSSCの一年 共に学ぶ仲間と新たな学問との出会い

RSSCでは、ゼミナールに受講生全員が所属し、修了論文を書き上げます。修了論文完成に向けての主体的な学びを、ゼミナール担当教員がサポートしてくれます。また、様々なバックグラウンドの仲間と出会い、お互いに理解を深め、多くの学びの時間を共有していくのもゼミナールの魅力です。

さらに、教室の中で修了論文について意見交換をするだけでなく、教室を出て行う課外活動も貴重な経験です。

同じ目標に向かって切磋琢磨しながら、濃い時間を共に過ごしたゼミ仲間とのネットワークは、修了後も様々な形につながっているようです。



ゼミナールの枠を超えて、本科・専攻科それぞれが、全員一堂に会して集まる場として、**オムニバス講義「学問の世界」**があります。本科の「学問の世界 A」では、RSSCでの基本的な学びの出発点を共有する「入門」からはじまり、本科ゼミナール担当教員が輪番制で、専門分野とRSSCの学びを関連付けた講義を行います。専攻科の「学問の世界 B」では、講義担当に理学部教員が加わり、理系の世界を通じて知的視野を広げていきます。毎週様々な分野の講義を聴くことで、自身の興味の枠を超えて、新鮮な知の体験をする場にもなっています。

※授業や各種活動は、感染予防策を講じた安全な形での実施を検討しています。

今回は、「夏期集中講義」紹介などを予定しています。

RSSC事務室から、キャンパス便り

今回はメディアセンター紹介です。

メディアセンターでは、授業や個人学習等で利用するパソコンやインターネット等のサポートを受けることができます。また、Word、Excelの基礎を学べる「ITスキルアップ講習会」*が開催されており、RSSC受講生も積極的に参加しています。パソコンやインターネットに不慣れな方も、前向きにITと向きあい、修了論文やレポート作成に取り組んでいます。こうして修了されたRSSCの先輩方は、今では「オンライン研究会」や「オンライン帰省」など新たなITに挑戦しているようです。 *2020年度開催日未定



セカンダリー・シンボルとして位置づけられ、立教の学生や生徒、児童、各校の卒業生に広く愛用されているユリの紋章は、1932年、学生キリスト教団体「立教大学ローバース」によって使用され始めました。ユリは純潔の象徴とされ、キリスト教と深いつながりを持っています。

元来、ユリの紋章は神の三位一体性を象徴したもので、キリスト教国では勝利の記号に用いられますが、本学院では知・徳・善あるいは、愛・正義・誠を象徴するものとして使用されてきました。

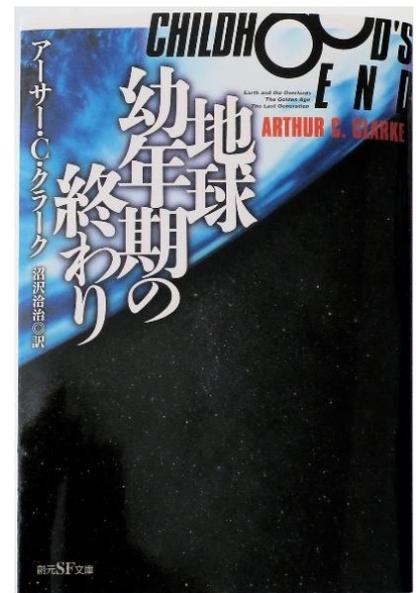
コロナがもたらす相対的な視点

RSSC 教員
立教大学名誉教授 栗田 和明



コロナ禍は私たちの生活全般を大きく変えました。いままで当然と思っていた様式以外にもある事に気づきつつあります。従来のやり方を相対的に評価することができるようになったということでしょう。コロナがもたらした相対的な視点は、今までの生活や歴史を鳥瞰して整理し直す効用があります。紀元前（BC）・紀元後（AD）ならぬコロナ前（BC/before Corona）・コロナ後（AC/after Corona）との区分を提案している論者もいます。『ペスト』も私たちの生活を振り返らせる作品としてよく言及されています。同様に、相対的な視点を拡張して人類の行く末に思いを巡らせる作品として SF の名作『地球幼年期の終わり』（訳によっては『幼年期の終わり』と記すものもあります）を紹介します。概要は以下です。

地球に異星人が来訪する。彼らは人類よりもはるかにすすんだ技術と社会をもち、それらを長い年月をかけて人類に教え、人類もそれを急速に吸収していく。人類は長足に進歩していくが、ある画期をすぎると次世代の人類の子どもたちは親世代とは隔絶した相（フェーズ）にすすみ、もはや地球やいままでの肉体に執着もなく、親世代ともコミュニケーションも取れない存在へと変わっていく。子どもたちは宇宙全体を活動の舞台とするより普遍的な活動体になり、地球を離れていってしまう。来訪した異星人自身は当時の人類よりも優れた面があったが、進化の袋小路に入っていてあたらしい人類のような相に進むことが出来ない存在であった。彼らはいわば助産師として普遍的な存在に生命が変化していくのを助ける役目を帯びた者たちであった。人類が幼年期を終わって新世代となって宇宙に旅立っていくのを、人類の親世代と来訪した異星人は見守り、取り残されていくのである。



A.C.クラーク著 『地球幼年期の終わり』
1953年 沼沢治治訳 東京創元社

小説では親世代と次世代で大きな断絶があります。我が子である次世代の人類はあらたな相に入って普遍性を獲得していくので、親世代の人類にとっても慶すべきことかもしれませんが、切ない感じがします。私たちはコロナ禍という一つの画期を通過しつつあります。その前後で私たちは画期の前後の一方しか見えず SF の親世代と次世代のような断絶しかないのでしょうか。あるいは異星人のように全体は見渡すことができますが、一種の停滞と諦観の振る舞いをするのでしょうか。そうではなく、親世代と、次世代の人類、そして来訪異星人、の三者を描いて読者に壮大な相対的視点を提供する作者のような力を得たいものです。私はタンザニアの農耕民を中心に文化人類学の勉強をしています。文化人類学も世界の多様な人々の生き方を知ることを通して、相対的な視点をおおいに涵養します。RSSC でも一緒に相対的な視点を探っていきましょう。

<教員専門分野>

文化人類学、民族学、人文地理学